

第23回図書館総合展 国立情報学研究所主催フォーラム

「機関リポジトリからみた管理・検索基盤」 (2021/11/9)

質問回答一覧

No.	質問	回答
1	研究者は研究の途中での異動もありますので、やはり機関単位のRDMやリポジトリで一連の研究フローを設定するよりは研究分野別の方が適切であるように思われます。継続性・安定性という意味でもJ-STAGEでは学協会の論文誌を公開できていますし、このまま機関リポジトリで話が進んでも活用されない可能性もあるのではないのでしょうか。	回答者：前田 コメントをいただきまして、ありがとうございます。研究者視点では、おっしゃる通り、第1に分野への帰属意識が強く、機関はその次といったイメージ化と思います。そのため、分野リポジトリやプレプリントサーバがすでに確立されているであればそのほうが便利だと思います。一方で、そうではない分野では機関リポジトリが受け皿になる可能性があります。図書館はこの辺りの事情をふまえて、中立的立場からどういったサービスがあるのかを案内できればよいのではないかと思います（ご指摘の通り、逆に機関リポジトリの活用を目的にしてしまうのは本末転倒であると感じています）。
2	機関リポジトリに登録するかどうかについて著者である研究者の方の意思を重視するのであれば「CiNii→OAリクエスト→機関ID→機関IR担当者→著者」ではなく「CiNii→OAリクエスト→著者ID→Researchmapなど→著者→機関IR担当者」の方がよいのではないのでしょうか。	回答者：河合 著者への直接の通知が可能になれば、さらなる開発により、CiNiiをアカデミックSNS的なものと発展させることもできるかと思います。
3	リクエスト通知について、現状においてリポジトリ公開を認めていない学協会に公開を認めるように促せる手段があればと思います。	回答者：河合 SCPJと照合するなどして、公開不可の場合は学協会に通知するといったことが可能かと思います。
4	新設大学（公立・地方・総合大学）の附属図書館で、大学院を見据えて機関リポジトリの整備・調査として聴講しています。学術情報流通や研究者の研究～教育までの一連のフローが分かれば、効果的な整備や現場での支援ができるのではないかと感じています。そういったことを学習する機関や機会には、どのようなものがあるのでしょうか？	回答者：前田 新設大学の視点からのコメント、ありがとうございます。総合大学ということで研究者の行動様式も多様かと想像いたします。学術情報流通に関しては、SPARC Japan(https://www.nii.ac.jp/sparc/)などをご参考にしてはいかがでしょうか。研究フローと基盤整備についてはJPCOAR (https://jpcoar.repo.nii.ac.jp/) にて初任者向け研修資料や教材、各種説明会・イベントで使用された説明資料が保存・公開されております（無料）。JPCOARでは今後も内容をアップデートした研修や情報共有の場を提供していきますので、そのような機会もぜひご活用いただければと思います。
5	リクエスト通知は便利そうに感じますが、研究者の場合、やはり異動がネックとなるかと思います。「A大学在籍時に発表した論文に対してリクエストがあったが、著者は現在B大学在籍」という場合、どちらの大学の担当者が対応するか・どちらの大学のリポジトリで公開するか、というのが難しいと感じます。	回答者：河合 運用ポリシーと矛盾するかもしれませんが、依頼の関係上、現在の所属機関の図書館が対応することになるかと思います。
6	河合さま> CiNiiでの著者と機関名の紐づけのためにも、次期JC（WEKO3）の著者DBはきちんと使えるものになってから移行開始していただきたいです。	回答者：河合 OAリクエスト機能はまだ構想の段階にあるものなので、既存の著者DB等の完成を優先すべきだと思います。
7	河合様)許諾（公開不可）確認済みの論文も多く、リクエストをいただいても公開できない場合もあることから、ユーザー認証だけでなくリクエストボタンを表示する／しないを選択できるようにしていただきたいです。	回答者：河合 SCPJと照合するなどして、リクエストの可否を表示するといったことが考えられます。
8	（前田様）理系はNIIのサービスセット（GakuNinRDM→JAIRO Cloud→CiNii Research）を一連の流れとして組み込むのは、既存の海外大手出版社の各種サービスもあり、無理があるのでは、というお話でした。そのこと自体に特に課題はないとお考えでしょうか。（あるかないかわからないのですが…）	回答者：前田 非常に鋭い質問をありがとうございます。課題は大ありだと感じています。2つの見方があると考えています。ひとつ目は、一連の流れを理工系にあてはめる、それ自体です。これはCiNiiがWeb of ScienceやScopusのように海外の論文情報までカバーできるようになれば解決される（このサービスセットが理工系にも普及する）と考えられます。一方で、そうでない場合は理工系ではGakuNinRDMのみがつまみ食いに使われるかと思います。ふたつ目の視点は海外出版社への依存です。理工系の多くの分野では、出版（と購読）部分をElsevier, Springer, Wileyなどの大手出版社へ依存している状態です。オープンアクセスやRead&Publish（あるいはPublish&Read）についても出版社のビジネスモデルに乗っかっています。一方で、出版部分を分野コミュニティによって運営されるプレプリントサーバやリポジトリなどに移行できれば、より安価で持続可能な出版フローとなり得ます。これは購読費やAPC（article processing charge）からの脱却というひとつの考えです（代わってプレプリントサーバやリポジトリの運営費を分担していくことになるでしょう）。この際の課題は、研究者自身にこの問題（ジャーナルの購読費、APCとの二重取り）を認識してもらうことです。同時にインパクトファクターやそれに基づく人事評価などからも脱却する必要があるでしょう。また日本だけでは成し得ない変革ですので大きな困難ではありますが、NIIのサービスセットは、このようなドラスティックな変化を生み出す土壌として捉えることができると 생각합니다。
9	研究者にニーズがない機関リポジトリをブラッシュアップして研究活動に組み込ませていく必要性はどこにあるのでしょうか。研究活動が現在の流れで完結しているのなら、学術SNSなどが発達していれば十分なのではないのでしょうか。	回答者：尾城 SNSは持続可能性に疑問があります。いつ消滅するかわかりません。一方、機関リポジトリは、機関が責任を持って運営しているので、データの長期保存やアクセス可能性も保証されているという優位性があります。

No.	質問	回答
10	林様)研究データの公開に関し、リポジトリでは研究データ本体の公開も行うということですが、その場合ファイルサイズが大きくリポジトリの容量を圧迫することが予想されます。JAIRO Cloudの利用料金が容量によって変動する中で、特に中小規模の機関では大きな負担になることが想像されますが、何か対応の検討はありますでしょうか。	回答者：林 研究データ保存、公開にかかるコストには、人とストレージ等の資源の2つに大別されます。JAIRO Cloudでは、まず、資源についての対策の検討をはじめています。できるだけ維持費がかからないストレージやクラウドサービスの選択、選択の幅を広げるためのシステム対応を実施しています。今後は、資源の使用状況を鑑みながらシステムとしての最適解を模索していきます。人のコストについては、今後の検討課題ですが、国立大学等の先行機関を参考に、システムとして何を支援できるかを、検討していきます。
11	研究者は所属も変わるため手続き面でも研究時の検索面でも、機関リポジトリではなく、学協会や研究者コミュニティ単位でのプレプリントや研究データリポジトリの構築支援（cf. J-STAGEでの学協会論文誌公開支援）をした方が効果的ではないでしょうか。（紀要等の機関刊行物の公開は機関側で担うべき重要な役割だと思いますが…）	回答者：前田 コメントをいただきまして、ありがとうございます。研究者視点では、おっしゃる通り、第1に分野への帰属意識が強く、機関はその次といったイメージ化と思います。そのため、分野リポジトリやプレプリントサーバがすでに確立されているであればそのほうが便利だと思います。一方で、そうではない分野では機関リポジトリが受け皿になる可能性があります。図書館はこの辺りの事情をふまえて、中立的立場からどういったサービスがあるのかを案内できればよいのではないかと思います（ご指摘の通り、逆に機関リポジトリの活用を目的にしてしまうのは本末転倒であると感じています）。
12	研究データの登録に際して、機関リポジトリを選ぶメリットは何でしょうか。	回答者：林 機関リポジトリの特徴は、1) 機関が運用管理している点、2) 論文OA等の実績がある点、3) それを支援するコミュニティが存在する点です。研究者にとって1) は、安心して預けられるというメリットがあります。また、慣れない作業を実施する上で、機関の支援を受けれる可能性があるというメリットもあります。2)についても、研究者にとって、機関リポジトリであれば、メタデータについての相談もできるというメリットがあります。3) については、機関側のメリットとなります。研究者の多様性に1機関で対応するのは、物理的に困難ですが、相談できるコミュニティが存在するというのは大きな強みです。研究者にとっても、他機関の状況を参考にできるというメリットがあります。
13	（林先生）研究データへのメタデータ付与というのが、まだいまひとつピンときません。論文であれば書誌事項という決まったフォーマットがありますが、研究データのメタデータは、そもそもどのような項目があるのでしょうか。現在の機関リポジトリは、そのメタデータ項目に対応できているのでしょうか。	回答者：林 研究データのメタデータには、1) 分野特化のメタデータ、2) 再利用のためのメタデータ、3) 流通のためのメタデータ、の三種類があります。1) 2) については、分野依存であり、研究データに関する知識が求められることから、イメージがつきにくいかもしれません。しかしながら、3) については、これまでの書誌情報の延長線上で考えられるメタデータと考えています。JPCOARスキーマは研究データへの対応を想定して作られたものですし、統合イノベーション戦略推進会議による「公的資金による研究データの管理・利活用に関する基本的な考え方」では「メタデータの共通項目」が示されており、JPCOARスキーマとのマッピングについて検討が進んでおります。
14	尾城様に質問です。ご紹介のあったグリーンOA支援システムは本運用の開始予定などはあるでしょうか。利用にあたって大学側が準備しなければならないことがあるか等、詳細を教えていただけないでしょうか。	回答者：尾城 2022年度から本運用する予定で準備を進めています。確定したら、JPCOARを通じてアナウンスします。現状では、WoSを契約していることが、使用の前提となります。
15	（尾城様）論文提供依頼を研究者に出すと、共著者への許諾確認が面倒だとよく言われます。研究者にとってはIRに自身の論文を登録・公開するメリットより登録の手間のデメリットが大きいようで、図書館としてどうやってサポートしていけばいいのか、アドバイスはいただけないでしょうか。	回答者：尾城 共著者からの許諾については、論文出版後に許諾をとるのは確かに面倒なので、できれば、出版前に、出版されたらAMを機関リポジトリに載せることの許諾を共著者からとっておいてもらうのがよいと思います。また、出版後にAMを収集するのではなく、もっと早い段階から、例えば、プレプリントの段階から機関リポジトリを使ってもらえるようにすることを考えるべきだと思います。
16	現在の機関リポジトリ運用でも大変な機関は、研究データに対応できるのでしょうか。	回答者：林 従来の図書館だけの運用では、困難となる可能性があります。研究者の参加を促すことは当然ですが、図書館だけの問題ではなく、機関全体の問題として捉えていく必要があります。公的資金による研究成果公開が進む中で、機関として機関リポジトリをどういった位置づけにするかの検討を進める、よい機会ではないでしょうか。また、中小の機関についての課題やコストを洗い出していく必要もあります。その上で、機関個別で考えられること、全体として考えるべきことを整理していくのはよいのではないのでしょうか。
17	（尾城様）研究者は論文出版の過程で出版社が機関リポジトリへの登録を許可していることを知る場面があるのでしょうか。自分から検索、または出版社に問い合わせるのではなく、例えば大手出版社であれば出版社が用意しているライセンス等の選択画面などの一環として目にする場面があるかどうか、という質問です。	回答者：尾城 ジャーナルのAuthor Rightsなどのページに登録の可否が書かれていることが多いと思いますが、研究者は見えていないのではないのでしょうか。そもそも機関リポジトリが何かかわかっていない研究者も多いと思います。以前から言われているように、研究者に対する働きかけやアドボカシー活動が必要だと思います。

No.	質問	回答
18	現在のシステムでは、日本語による査読済み論文がほとんど捕捉できないと思われますが、その対応策は何か考えていますか？	回答者：尾城 これは悩みの種でありまして、英語論文の場合は、Web of ScienceやScopusのような文献データベースが整備されているので、それを使って、グリーンOAにすべき論文の母集合を作ることができるのですが、日本語論文の場合、それに相当するようなデータベースがないのが問題でありまして、わたくしどものCiNii articleは、学術論文以外のものも結構含まれていますし、著者の所属のデータが整備されていないので、機関毎の絞り込みもできないなどの問題があって、今のままでは使えない。J-STAGEを使うという手もありますが、J-STAGEの論文はほとんどが既にブロンズOAで、オープンになっているので、それをわざわざリポジトリに登録してグリーンOAにする必要はあるのか、といった問題もあって、大きな課題のひとつととらえています。大学の業績データベースとの連携も含めて、継続して検討していきたいと考えています。